Book Review

自著によせて・・・・神田　順

■ 安全な建物とは何か／神田順 著

安全の問題は、とても奥が深い。自分の中で学問的な視点での興味も広がっていて、机の上で考える問題としても、おもしろい。そして、何よりも、建築物の耐震について考えると、工学の問題が法律の問題になっているところが奇妙である。本当ならば、経済学とか、社会学とか、心理学とかも交えてまとめてみたい気持ちはあるが、あまり無理をせずに、今の時点で、どこまで問題として捉えられるか、書いてみることにした。

少なくとも、地震で建物が被害を受けるというのは、現実の問題であり、設計や施工の技術問題である。それを社会がどのように位置づけるかということになると、法律の目的、メディアの役割、事業の収益性など、技術問題と距離を置くところに、より大きな課題が隠されている。

ちょうど、ニュージーランドのカンタベリー大学に６ヶ月研修に出ることになっていたところに、出版社から企画の提案を頂いた。今のような建築基準法や確認制度で、建築の耐震性が良くなっていくのだろうか、技術や技術者の知恵が活かされるのだろうか。法的な制度が一人歩きしている。それなのにその制度の科学的内容には不整合や混乱が少なくない。そんな意識が、いつも書く力になっていた。

一人一人が耐震安全をどこまで考えることができるのだろうか。少なくとも、「法律に任せる」とか、「国がやるべきだ」からは何も生まれない。しかし、専門家だけが「誠実に仕事をしよう」というのでは、状況は悪化するばかりである。社会制度の提案もしている。

社会制度をみんなで考え直そうというのは、簡単でないのはわかる。しかし、だからこそ、専門家が一般市民に語りかけることが重要なのだと思い、本書を仕上げた。誰にも分かり易くを心掛けたが、如何であろうか。それでも、専門家が耐震基準のことを語るのに、どのようにすれば良いか、その一例と思ってお読みいただければ有難いと思っている。安全は、つらい問題だけれど、専門の立場からは使命でもある。

■ 発行元／技術評論社

■ 単行本 ２２５頁＝ １，５８０ 円（税別）

最近、読んだ本・・・・河合　誠

■ 河井寛次郎の宇宙／河井寛次郎記念館 編

この本とめぐり合ったのは、京都清水にある河井寛次郎記念館でした。この記念館は、寛次郎が自宅兼工房として昭和１２年から３０年間すごした建物で、奥には登り窯もあり彼の陶芸作品　木工家具　金工作品などが手が届く距離で鑑賞できます。

本の内容は、家族を含めて数人の近親者が寛次郎の作品や人となりを紹介し、美しいカラー写真でかれの作品が掲載されており、実物を見た時の感動がこれらの写真を見るたびに思い出されます。

本書で寛次郎の言葉として紹介されている中にこんなものがあります。

「おどろいている自分に、おどろいている自分」

この言葉はいつも私の頭から離れません。民芸運動の推進者として、著名な陶芸家として晩年まで衰えを見せない彼の創作意欲は、この言葉に象徴される好奇心の持続性にあるのでしょうか。

寛次郎の作品は、清水焼とはかけ離れて　肉厚で大きく重く繊細さとは正反対。縄文土器やアイヌ文様を思い浮かばせる作風です。釉薬の天才と言われるだけあり大胆で巧妙な彩色も圧巻です。さらにこの記念館自体がどこか都会風であるにもかかわらず田舎屋の雰囲気がありとても居心地がいいのです。もう一度二度　訪れたい建物です。実は、この建物の図面がないか受付の女性に尋ねたところ、簡単な間取り図（余り正確ではなく１階平面と２階平面が合わない）しかなく、あきらめて写真を元に記憶をたどり自分で書いてみたことがあります。残念ながら完成にいたらず次回訪問するときにはグラフ用紙を準備して行こうと思っています。

是非サーツの皆様には、入場者の少ない時間帯にゆっくりと河井寛次郎記念館を探索していただきたいと思います。

■ 発行元／講談社

■ Ｂ６判 ２１６頁＝ １，８００ 円（税込）